

婦人宣教師、ミセス・ブラインの

「おばあちゃんの手紙」(8)

～アメリカン・ミッション・ホームの

創立者の一人～

小林 恵子

十五、

愛するメアリー

横浜 一八七三年四月二十日

この手紙はあなた宛てになっていますが、パーティとキティーのぶんも入っているのだと皆に言ってお下さいね。私は時々あなたたちの一人に宛てて手紙を書いてみたいのです。そうすれば手紙を貰った人は私とその人のことをどんなに思っているか自分にだけ語りかけてくれていると感ずるでしょう。そして次にはその喜びを惜しみなく他の人にも分けてあげようという気持ちになるでしょう。

私はあなたたちが若いときにこういう心を身につけてほしいと願っています。だんだん大きくなるにつれ、他の人々を幸せにすることの喜びにまさる喜びはないということが判ってくるでしょう。利己的でいつも自分を楽しませ喜ばせることしかない人々は幸せな人とは言えません。もし、あなたたちがおばあちゃんを経験と忠告を守ってそれを身につけてくれるなら自分のことより他の人の幸せをまず考え

ようとするとしよう。でも今日、この手紙を書き始めたのは、あなたたちにお説教をするためじゃないのです。あなたたちに話したかったのは、家の庭の美しい芝生の上で私たちの小さな子どもたちがピクニックをしたというお話です。

あなたたちは今度の新しい家のまわりにとっても広い土地のあることを知っていますね。その裏庭で——と言っても実際には家の裏ということじゃなくて皆がそう言ってるだけです——それは大きくて円形の草地なのです。この草地の周りにじゃりを敷いた広い道があり、馬車がそこを通って大きな門に入り建物の裏口へ行けるようになっていきます。

この車道の外側は広い花園で、いろいろな種類の美しいかん木や常緑樹が植えられ幾つかの花が咲いています。この花園のなかに、これは日本独特のやり方ですが、ごっこつした石を積み重ね、その石の割れ目を土でふさいでそこに美しい小さなつる草や植物を植えているのです。その植物のあるものはとても珍しいもので、高い木々や低い木々の間にま

じって本当に愛らしく見えます。私はアメリカの庭師たちに日本人のこの石を使った庭のつくり方を学んでほしいとよく思います。

この庭はこのようにして子どもたちが遊ぶのにとっても楽しい場所になっているので、ここの子どもたちはどこか他に遊びに行くこともないのです。でも、私たちは子どもたちを楽しませるためにできるだけの事をしたと思って庭の芝生でお茶の会を開くことを考えました。そして木々の間で子どもたちを陽気に遊ばせたいと思ったのです。

私たちは円形の草地のまんなかに大きな高い竹の棒を立て太いひもと滑車を使って星条旗をその天辺にたてました。旗が風にひるがえるのを見たとき、私たちはいつも男の子がやるように女の子たちにも「フレー（万歳）」と言わせたくまりました。この旗を見ると、誰かが必ずこう叫ぶので、「フレー！」と言うのを聞かずにいれなかったのです。私たちは旗竿の周りに美しい小枝とかん木をからませ適当な高さまで覆ってその上を常緑樹の可愛い緑

の葉で飾りました。そのため旗竿はまるで小さな森のなかに立っているように見えました。

それから私たちは一方の側に長いテーブルを置き、その上にいろいろな花やつる草や私たちが庭からとってきたものや工夫して作った花輪を置きました。私たちは美味しいジャムをぬったパン（日本人はバターを食べないので）、クラッカー、いろいろな種類のケーキや蜜柑、木の実、それから種類の違った飴―これは日本で作られているものですが全く害が無く安くてとても美しいものです。この飴は砂糖が余り入ってなくてキビやアワの穀粒や米の粉を使って作られているのです。私はこんなに美しく飾られたテーブルを見たことがありません。私たちはみんな大喜びしました。日本人は食べるときテーブルの周りに座るということをしませんし、この女の子たちは誰もこんなに美しく飾られた大きなテーブルをこれまで見たことがなかったのです。私たちはこの子たちに文化的な生活をするのがどんなにすてきな事かを知ってもらいたいです。そし

て私たちはこのようなやり方で子どもたちに教えるうとしているのです。

子どもたちはみんな一番よい着物を着ました。でも、その着物は黒っぽくて大体が紺色なのですが明るい色の帯をしめています。そして髪のを何か綺麗な色のもので留めています。この髪飾りが子どもたちをとっても可愛く見せるのですよ。みんなが芝生の上で一緒に集まって楽しくゲームをしているのを見ると、この女の子たちは決して賢沢ですてきな着物を着ているわけではないのですが私たちとしてはとても喜ばしく美しい光景でした。

皆はいろいろな遊びをしました。とても変わった遊びもしましたのでもし時間があれば幾つか書いておきたいのですが今はそれができません。ゲームをしたり歌を歌ったりみんな好きなことをして遊んだ後、私たちは子どもたちにテーブルの周りに半円になって草の上に座るように言いました。それから私たちが皆に食べ物を配りました。子どもたちが静かでお行儀がよいのを見るのは本当に気持ちがいいも

のです。急いで先を争ったり、自分本位だったり他人の悪口を言いあうなどよくアメリカで子どもたちがピクニックやパーティーなどで見せるようなこともなく、皆がとても楽しそうに私たちの言うことを注意ぶかく聞いてその通りにしようとするのです。

お茶の会が終わったあと、子どもたちは旗竿の周りで追いかけてこしたり、別のゲームをしたり歌をうたったりしました。こうしてピクニックが終わると小さな子どもたちは自分たちの寝室にひきあげ、大きな女の子たちは明日の勉強の予習のために学習室に行きました。

ここの子どもたちがこんなに素敵で幸せな時を過ごし、おばあちゃんが少しでも役にたった事を知ってあなたも喜んでくれるでしょうね。おばあちゃんの願いはただ一つ、天にいらっしやる父なる神様があなたたち一人一人に幸せで有意義な日々をお与え下さるようという事です。

あなたたちの愛する おばあちゃんより

十六、

愛する孫たちへ

静岡 一八七三年五月九日

*

この日付を見て私が違う場所から手紙を書いていることが判ると思います。ここはクラーク氏の家です。私は今、彼のお母さんのようになっていますからクラークさんがここで快適に暮らしているかどうか見に来たのですが、ついでに日本のなかでの旅行も楽しんでいっています。それは本当に楽しい旅でした。でも旅のなかで私が不安な思いをしたと言うと、あなたたちはそれならどうして楽しい旅なのか不思議に思いかもしれませんね。私は日本のことをもっとよく知りたいと願っていて、この国のいろいろな慣習や人々の生活習慣になじみたいと思っ

ているのです。だから少しくらい困ったことに会って我慢しようと思っています。

この古い町の事やここに来るまでに私が経験した

事はすでに長い手紙を書きましたのであなたたちはお父さんやお母さんにその手紙を読んで貰って下さいね。ただ私はここに来てから起こった二つの事だけお話ししたいと思います。きっと面白いとみんな思ってくれるでしょうから。

一つは古いお寺を訪ねた事と、その往復の乗り物のお話です。クラーク氏は彼の学校の仕事で毎日が忙しかったので一人の日本の青年にこの大きな町で一番興味のある大きなお寺を私と一緒に行って案内するように頼んでくれました。

初めに書いておくべきですが、静岡は横浜から南へ百マイルほど離れたところにある非常に大きな町です。ここは徳川幕府の最初の將軍の出生地ということでも有名なのです。彼はここに三つの大きな堀、または水路で囲んだ大きな城を建てました。その城は今では全く廃墟になっていて、あるのは巨大な石の山ばかりでその上を覆ってつる草や低い木々が生い茂っています。

クラーク氏の家は堀の一番外側の堀の角に建って

います。そこから一方を見るとこの町が遠くまで見渡せ、また他方から見ると、重なって続く堀とその間の庭とその向こうに荒れ果てた古い廃墟の跡を見ることが出来ます。

さて、お寺への訪問ですが、私たちは「人力車」という乗り物で出かけました。私たちが堀の堀の外に出たとき、人々は車に何だか変わった人が乗っているのに気がつき始めました。というのは私がこの町に来た最初の外国の女性だったからです。人々は私たちの車の後を追いかけて来ました。男・女・子どもたちとその数はだんだん多くなってきました。私たちを乗せた車ひきの男は、これは困ったことになったと思ひ、ものすごい速さで走りだしました。私たちは裏通りを抜けていきましたが、それでも人々が追ってくるのを避けることは出来ませんでした。人々が追いつく少し前にやつのこと、私たちは寺に到着し門のなかに入ることができました。このお寺がびっくりするほど広く大きかったことや沢山の部屋数があったこと等いろいろ書きたいの



▶ 「おばあちゃんの手紙」に掲載されている人力車の絵

ですが時間がありません。私たちがお寺のなかをすっかり見て回った後で玄関の方へ歩いていくと、人々の話し声や叫び声、石の参道を歩くカラコロという下駄の音などが聞こえてきました。私は外へ出

ていく勇気がなかったので一緒に来てくれた青年に裏の出口は無いかと尋ねました。でも彼が誰かに聞いてくれて判ったのはこの出口しかないという事で私はここから出るしかありませんでした。

玄関から一步外へ出たとき、私が見たものは大勢の人々の顔、顔、顔でした。どの顔も好奇心で一杯で騒がしく、私には何だかとても怒っているように見えました。何故かという、この国には至るところに外国人を嫌っている人々が多くいて外国人が日本をなかを歩きまわるのをとても毛嫌いしていたからです。私を案内して来た青年はだんだん落ち着かない様子になってきました。こんな大勢の人々を前に外人の私を案内することは本当に勇気のいることだったのです。この騒ぎのなかで人々は私をもっとよく見ようとつめよってきて、私が本当に血や肉をもった人間かどうか見ようと私の洋服をひっぱたり手を掴んだりさえしたのですが、それ以上に私を恐れさせるような不作法なことは何もしませんでした。

私たちはやつとのこと人力車に乗り、街の通りを走りだしましたが、人々は又、この車に追いつこうと一生懸命走ってくるのです。帰る途中、私は横浜にいるクリスチャンの青年の両親の家を訪問するつもりでした。その青年が私に両親に会って欲しいと熱心に頼んだからです。その両親は私が彼等の息子のことをよく知っていることを話すと大変喜んでくれました。そして私が玄関の側に咲いていた美しいバラの花をただ礼儀としてほめただけなのですが、ご主人は家のなかに走って行って大きなナイフを持ってきて私が何をするのかしらと思っているうちに見事な花が一杯ついているバラの大きな枝を根元あたりから切って深くお辞儀し、プレゼントして下さったのです。言っておきますが、日本ではまだバラの栽培は始まったばかりで人々はバラをとても貴重なものと考えていたのでこのご主人がした事はほんなに心のこもった贈物であったかあなたたちにも判って貰えると思います。

私はこのバラの大きな枝をどうして持って帰った

らよいか判らなかつたので一緒に来た青年のH氏に彼の乗る人力車に載せて貰えないかと頼みました。すると、ご主人はまた家のなかに走って行き、しっかりした縄を持ってきて人力車の天辺にこのバラの大きな枝をくくりつけました。それはまるでこの青年の頭上を覆う美しい天蓋のように見えました。

それから私たちは家に向かって出発しました。でも、こんどは花を飾ったH氏の人力車は私よりも目をひくはめになり、気の毒にもこの青年はこの騒ぎと興奮ですっかりおびえ家に帰り着いたときには幽霊のように真っ青でそれから二、三日は本当に具合が悪かつたそうです。

あなたたちにお話したいもう一つの事は先日之夜に開かれた音楽会のことです。クラーク氏の日本の友だちの何人かで開いて下さったもので、ある種の日本の音楽を私たちに聞かせたいという事でした。以前の手紙で私が書いたように日本人は歌というものを歌いませぬ。といってもこれは私たちが歌っている意味の歌のことです。この国の人々は幾

つかの素朴で風変わりな楽器を持っていて奇妙な低音と一本調子でうなるようにハミングするのですが、これを歌と言っているのです。でも、それは私たちの考えている音楽とは全く違っているのです。楽器を弾いている人々は技術的にはかなりの名人で、日本の昔から伝わる風変わりな演奏様式を見せて貰って私は本当に堪能しました。

けれども、私がつもつと興味をもったのはこうした音楽会を見ても判るのですが、日本の上流社会の女性たちがどのように教育されるのか、また音楽の演奏について女性たちがどのように考えているのかという事です。

ここに五人の女性がいいます。一人はクラーク氏の通訳をしているある人の奥さんで明るくて元気のよい小柄な人でまだ十五か十六歳でしょうか。ほかの四人はごく普通の中年の女性たちです。

この五人の女性たちが半円形になって床に座っている光景を私が絵にかけたらと思います。一人はお琴—ハープのような弦をもった長くて平べったい楽

器、他の二人はバンジョーにとてもよく似た三味線という楽器を持ち、残りの二人は歌うのですが、うなると言った方がよいかも知れません。小柄で若い奥さんはとても可愛くて目がぱっちりして頬が赤く素敵で風変わりな着物を着ていました。でも、彼女は真つ黒に歯を染めているのです。結婚した女性は不幸なことに皆そうしなければならぬというのですが私にはそれがとても不愉快で醜く見えました。五人はいろいろと違った曲を演奏し歌ってくれましたが私にはどれも殆ど同じように聞こえました。私にとつては演奏そのものより非常に珍しいものを見たり聞いたりの機会を与えて貰った事にとても満足しました。

歌が終わると、あの若い奥さんが一風変わった日本の踊りを踊ってくれました。それは非常に変わっていて好奇心をそそられるものでしたが、手紙で書きあらわす事ができません。それは戦争の歴史や愛の物語や死についてを身振りで表現しようとしたものでした。

静岡に旅したことはどれもみな本当に楽しく興味ぶかいものでした。もしあなたたちがこの事についてもっと知りたければ私が大人の人たちに宛てて手紙を書いているので誰かに読んで貰って下さいね。

さあ、もう「さようなら」を言わなければなりません。父なる神様が向こうにいる私の大切な孫たちみんなを見守っていて下さいますように。

いつも、愛をこめて おばあちゃんから

最初の手紙は新しい家の庭で開いた楽しいお茶の会のお話。ミセス・ピアンソンは石を積み重ねた日本の庭づくりの優れている事や砂糖を余り使わない米の飴について注目し、子どもたちの行儀が良い事をアメリカと比較して書いている。また、少女たちの着物は黒っぽい明るい色の帯や髪飾りが綺麗だと新鮮な目でとらえている。次の手紙はピアンソンが静岡に住むクラークを訪問したときのユーモラスなお話で日本の音楽にもふれている。

クラーク (E. W. Clark 1849 - 1907) は勝海舟の依

頼で静岡学問所の教師として招聘され、一八七一年十月に来日したお雇教師。彼を横浜に迎えたのが中村正直(のち、東京女子師範学校摂理、附属幼稚園創立に尽力)で、中村はこのときミッションホームに滞在、婦人宣教師たちの献身的な姿に感動し生徒募集広告を書いた。クラークの母親はミセス・ピアンソンと親友であった。彼は誠実な人でバイブルクラスを開き、多くの青年に感化を与えたが中村は彼によりキリスト教に導かれている。(註)

(国立音楽大学)

註 高橋昌郎著『中村敬字』吉川弘文館、『日本キリスト教歴史大事典』教文館、『横浜共立学園の二〇〇年』横浜共立学園発行 参照